

子宮肉腫（しきゅうにくしゅ）

子宮肉腫について

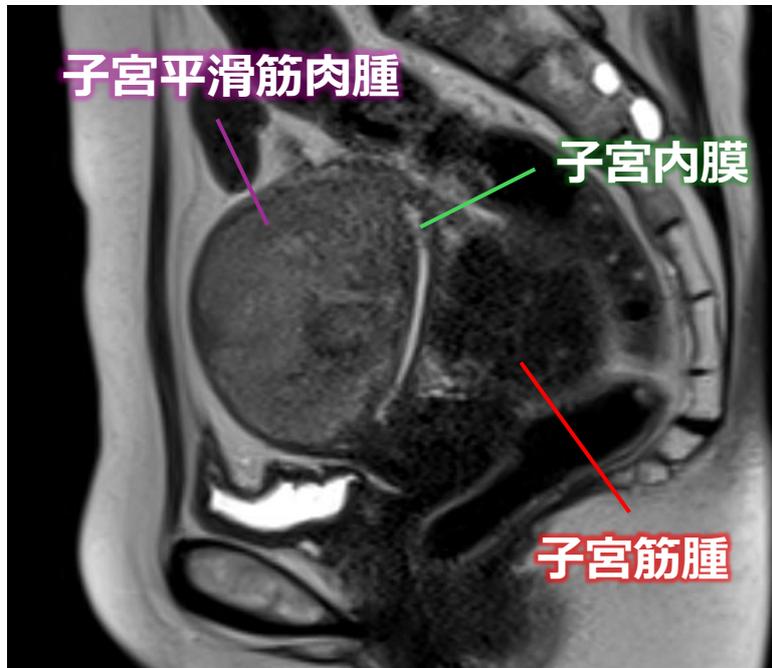
子宮肉腫は、子宮に生じる希少悪性腫瘍です。子宮体がん（しきゅうたいがん）とは、異なる細胞ががん化しており、全く別の疾患です。子宮に生じる肉腫は、さらにいくつかのタイプに分けられます。代表的なものとして、平滑筋肉腫（へいかつきんにくしゅ）、内膜間質肉腫（ないまくかんしつにくしゅ）、未分化子宮肉腫（みぶんかしきゅうにくしゅ）などが挙げられますが、その他さらに珍しい子宮肉腫も存在します。また、がん肉腫という病名もありますが、がん肉腫は「高悪性度の子宮体がん」という扱いになります。

平滑筋肉腫（へいかつきんにくしゅ）

子宮の筋肉から発生する悪性腫瘍です。術前診断が難しく、良性腫瘍である子宮筋腫（しきゅうきんしゅ）との区別が問題となります。症例によっては、子宮筋腫として子宮全摘術を行ったものの、術後に子宮平滑筋肉腫と診断される場合もあります。また、子宮筋腫と子宮平滑筋肉腫の中間的な腫瘍として、「悪性度不明な平滑筋腫瘍（STUMP）」と診断される場合もあります。

平滑筋肉腫の症例

図1 子宮平滑筋肉腫のMRI画像



58歳女性、以前より子宮筋腫は指摘されてきました。不正出血を機に、産婦人科を受診され、増大する子宮腫瘍を認めました。画像上、正常な子宮内膜を挟んで、子宮の後壁（画像右）に子宮筋腫を認め、子宮の前壁（画像左）に輝度の異なる子宮腫瘍を認めました。子宮全摘術の結果、子宮平滑筋肉腫の診断となりました。

内膜間質肉腫（ないまくかんしつにくしゅ）、

未分化子宮肉腫（みぶんかしきゅうにくしゅ）

以前の分類では、子宮内膜間質肉腫は、低悪性度（LG-ESS）と高悪性度に分類されていました。しかし、高悪性度のものは、子宮内膜間質との類似性が見られなかったため、現在では未分化子宮内膜肉腫と分類されます。LG-ESSは、比較的予後良好な腫瘍として知られており、ホルモン療法の効果も期待されます。その一方で、未分化子宮肉腫は、極めて予後不良です。

症状について

子宮からの出血が症状として考えられます。異常な子宮出血が持続する場合は、早めに受診することが大切です。しかし、子宮からの出血は、他の病気で生じることがほとんどであるため、子宮出血があっても肉腫である可能性は低いと考えられます。

診断について

不正子宮出血で婦人科を受診した際は、まず超音波検査で子宮の腫大がないか確認します。そして、超音波検査で子宮腫大を認めた場合、MRI検査を行い、子宮肉腫の疑いがないか精査します。ただし、MRI検査を行っても子宮肉腫の術前診断は困難な場合もあります。腫瘍の部位によっては、針生検を行える場合もありますが、大きな腫瘍の一部しか評価できないため、診断精度はあまり高くはありません。子宮肉腫が疑われる場合、子宮全摘術を行い、腫瘍の全体の組織診断が重要になります。ただし、組織診断も難しい場合があり、子宮肉腫を専門とする病理医にも診断を依頼することが望まれます。

治療について

子宮肉腫が疑われる場合、子宮全摘術が必要となります。患者さんによっては、良性腫瘍と思って手術した結果、子宮肉腫だったという場合があります。術後治療として、抗がん剤治療を行う場合もありますが、その有効性は明らかになっていません。また、再発時には、抗がん剤治療や分子標的薬等の薬物療法により治療しますが、一般的に予後不良な疾患です。

執筆者

- 氏名： 吉田 康将（よしだ こうすけ）
- 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
- 診療科： 産婦人科